

# 3 第3次計画における具体的取組

第2章で述べてきた第1次計画および第2次計画の振り返りを基に、ここでは第3次計画の具体的内容を述べます。

## (1) 計画が描く里山の未来像

計画が描く里山の未来像は、第1次計画から変わるものではありません。市内の里山である西山と東山とでは、その地域特性が異なるものの、この計画では、里山の未来像を地域ごとに限定するのではなく、本市全体の大きな取組方針として考えます。

この計画が描く里山の未来像とは、多様な林齢・樹種からなる森林や草地がバランスよく配置された明るい里山です。そこでは、多くの人々（市民、事業者、行政）が活動し、里山の資源を活発に利用しています。そうした里山は、市民にとって訪れやすく親しみのもてる環境となり、動物、昆虫その他の生物が互いにバランスをとりあった生物多様性に富んだ豊かな自然環境が形成されます。また、多くの市民の目が里山の森林に向けられ、木材利用が進展することは、過密・高齢化による森林の脆弱化<sup>ぜいじやく</sup>を防ぎ、森林の土砂災害防止機能や水源涵養機能の維持向上にも役立ちます。そして里山は、災害の少ない安全な暮らしを実現し、きれいな水の確保につながり、森林資源の提供、レクリエーションの場、人が大自然の営みを知る貴重な場となって、私たちの暮らしを豊かにしてくれると期待されます。

ただ、こうした里山の理想像は、一朝一夕に作り上げられるわけではありません。未来の里山への第一歩は、少しずつでも里山の資源を利用する気運を高める仕組みをつくり、市民の関心が里山に向かうことです。

## ●●●● 里山の未来像 ●●●●

### 1. 多種多様な環境から成り立つ里山

多種多様な林齢・樹種からなる森林や草地がバランスよく配置された明るい里山を作ります。また、そのような環境は、林床に咲く花や昆虫、鳥類・動物などが多様に生息する場となります。

### 2. 多くの人々が里山を資源として利用

里山が、市民にとって親しみのもてる場となり、レクリエーションの場、森林資源を得る場、大自然の営みを知る場として機能します。

### 3. 災害の少ない安全な暮らしをもたらす里山

木材利用の進展による森林の土砂災害防止機能や水源涵養機能の維持向上が、災害の少ない安全な暮らしを私たちにもたらします。

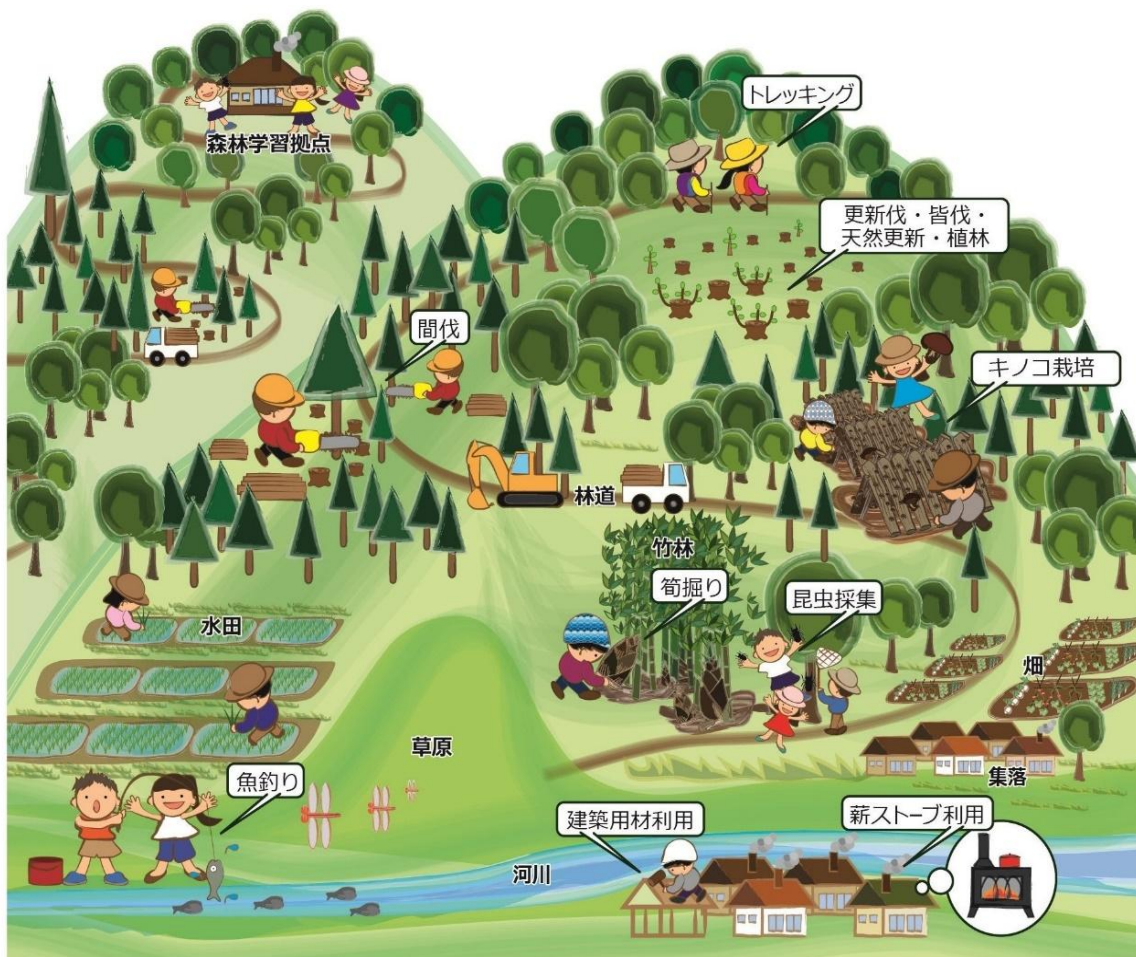


図 3.1 里山の未来像

## (2) 第3次計画の方向性

ここまで述べてきたように、第2次計画期間においてさとぷろ。はプロジェクトのみならず市民主導の取組も広がってきました。第3次計画において重要なことは、取組を継続すること、その仕組みを整え、運用することと考えます。

取組を継続するということは、それぞれの主体が自律的に、主体的に活動することが基本です。さとぷろ。は、それぞれの有志に基づく活動が前提だからです。この原則は、第1次計画から共通しています。第3次計画においては、それを一層、実現しやすいよう仕組みを整えること、その結果として活動の環がさらに広がることを目指します。

これらにより、市民へのさとぷろ。の認知度が向上する、という循環を目指します。そのためには、引き続きさとぷろ。が、里山に端を発する社会課題に向き合う取組も重要と考えます。

### 【第3次計画のコンセプト】

- 市民等の活動が引き続き自律的、主体的に展開できるよう、仕組みを整え、動かす。
- その結果として、さとぷろ。の認知度を向上させる。
- さとぷろ。の意義を広め、ひいては里山再生を前進させるため、里山に端を発する社会課題に向き合う活動を展開する。

### (3) 第3次計画が目指す目標

第3次計画においては、里山の未来像を実現するために、「里山への市民の関心」を一つの指標として、その到達点を明確にするために、さとぷろ。全体の到達目標を数値目標として次のとおり設定します。

#### 【さとぷろ。全体が目指す到達目標】

- 市民意識調査における市民の認知度を30%超にする
- さとぷろ。サポーターを600名にする。

さとぷろ。の活動の環も広がり、市内全体に活動フィールドが展開されるなかで、さとぷろ。の認知度は平成30年度からの約5年間で2.6%程度増え、さとぷろ。に関わる、または認知している市民の実数は大きく増えたと言えます。一方、割合としては未だ20%に満たない状況にあります。第3次計画では、さとぷろ。に関係するすべての取組の結果として、市民意識調査における市民の認知度(さとぷろ。を知っている人の割合)を30%超とすることを目指します。

また、さとぷろ。に関係するイベント・情報などの発信を目的に構築したさとぷろ。サポーター制度の登録者数は、第1次計画から第2次計画にかけて、180名から400名とほぼ倍増しました。このさとぷろ。サポーターは、さとぷろ。に参画する、応援するという、いわば仲間です。この仲間を、第3次計画終了時点で、600名にすることを目指します。

今後は、市とさとぷろ。機構が連携して取組全体の仕組みづくりを行い、さとぷろ。機構はさとぷろ。活動の基盤として、また中間支援組織としての機能を発揮し、各プロジェクトの取組を支援していきます。

そして、各プロジェクトにおいては第2次計画に引き続き状態目標を設定し、個々の活動を主体的に推進していくことで、さとぷろ。全体の目標を達成することを目指します。

#### (4) 各プロジェクトの取組

##### 1) 里山まきの環プロジェクト

###### ① プロジェクトが目指す成果

このプロジェクトでは、市民、事業者、行政が協働して、木質バイオマスのうち最も身近に利用できる安曇野産の薪を自らの手で生産し利用しながら、薪の地産地消を図ります。管理されていない森林に手を入れることにより薪を生産するだけでなく、森林の整備も行っていきながら、現代版の里山資源利用のあり方の仕組みを構築します。

###### 【取組目標】

里山の課題解決につながる薪生産体制が確立され、薪ストーブユーザーへの提供場所、方法、時期が多様化する。



## ② プロジェクトの内容

山林所有者などから里山に関する困りごとや課題に関する情報の収集と集約、蓄積を通して、社会的課題の解決とリンクした薪生産フィールドの確保に取り組みます。また、自ら薪生産ができる薪ストーブユーザーを増やせるよう人材育成に取り組むとともに、針葉樹薪の利用促進や薪ステーションの仕組みなども検討し、安定的な薪供給体制を構築します。

表 3.1 取組の一例

取組項目	取組の概要	背景
山林所有者との連携を通じた薪生産フィールドの確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域や山林所有者などからの相談や困りごとの情報を収集・集約し、解決に向けた取組につなげる仕組みづくりを行う。</li> <li>・山林所有者が抱えている課題を把握し、薪生産フィールドとして提供するメリットを創出する。</li> </ul>	地域や山林所有者が抱える困りごとや課題と、薪生産・供給のリンクが十分でない。山林所有者とつながり、里山資源の活用につながる仕組みづくりが必要。
薪供給体制の構築	<ul style="list-style-type: none"> <li>・薪づくり講習会など、人材育成の取組をさらに充実させる。</li> <li>・薪ステーションの整備など安定的な薪供給の方策を検討し具体化する。</li> </ul>	市内の薪需要は増える一方、供給体制は十分でない。放置された山林や支障木、誘引果樹などの活用の仕組みや、安定的で持続可能な薪の供給体制の構築が必要。

## 2) 里山木材活用プロジェクト

### ① プロジェクトが目指す成果

このプロジェクトでは、市内の里山で生産される安曇野産材の生産・流通・消費に関係する個人・事業者（森林組合・個人林業者・木材業者・建築士など）および行政が協働して、本市独自の小規模な安曇野産材市場の構築を目指します。

安曇野産材の利用は、建築構造材としてだけでなく、床材・壁板材から日常的な安曇野産材の需要まで視野に入れ、取り組みます。

#### 【取組目標】

山林所有者、林業事業者、製材加工事業者、建築士およびユーザー間での情報共有による供給体制を構築するとともに、市内外の需要の幅を広げる。



## ② プロジェクトの内容

第2次計画で試行した循環システムをより活発化させ、川上（山主・林業事業者）、川中（製材加工事業者）、川下（木材ユーザー）に安曇野産材が円滑に供給される仕組みを確立します。さらに、川下への働きかけとして地域材を利用する価値を発信し、多くの市民に安曇野産材に触れてもらう取組を進めます。

表 3.2 取組の一例

取組項目	取組の概要	背景
木材生産地から製材加工業者、利用者との情報共有の強化	山林所有者、林業事業者、製材加工業者、そして建築士や工務店などが積極的に情報の共有・更新を行い、安曇野産材の流通を促していく。	安曇野産材が円滑に流通する仕組みを作るため、安曇野産材の需給やストックの情報を川上から川下の事業者間で共有する必要がある。
安曇野産材利用の 프로모ーション活動	安曇野産材を活用することがもたらす暮らしへの恵みなどをわかりやすく伝え、市場を開拓する活動を展開する。	積木ワークショップや里山市などの企画を通じた安曇野産材の魅力発信を行ってきたが、安曇野産材がより市民の皆さんの身近に感じられる仕掛けが必要である。

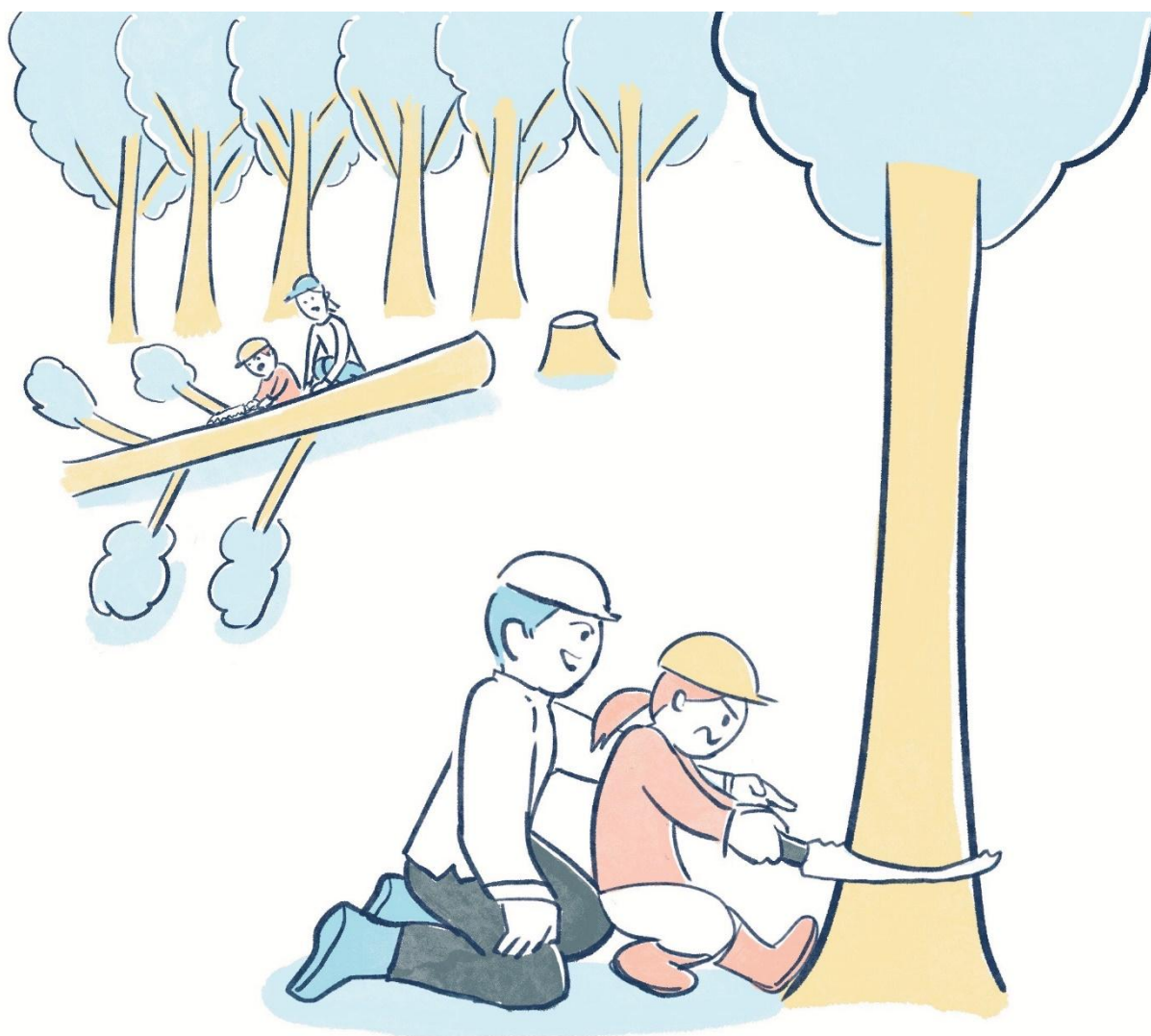
### 3) 里山学びの環プロジェクト

#### ① プロジェクトが目指す成果

多くの市民が里山で活動をするための基礎的な技術・知識を身につけてもらうことを目的として、「さとぶろ。学校」を継続します。この取組により、自ら里山に入り、楽しみながら活動できる人材を増やします。

#### 【取組目標】

幅広い年齢層や里山に対する様々な興味・関心を持つ市民が楽しめるような学びの場を提供し、受講生が自らに合うフィールドや活動に繋がる仕組みを構築する。



## ② プロジェクトの内容

第2次計画まで継続してきたさとぶろ。学校の修了生は100人を超え、年齢層の広がりも見られます。また、修了生がスタッフや講師となる学びの循環が生まれつつあります。第3次計画では、里山への入口としての機能をより充実できるさとぶろ。学校の多様なカリキュラムを検討するとともに、修了後も継続して里山活動に関わるためのフィールドや機会を提供するために他のプロジェクトや企画とも連携を深めていきます。

表 3.3 取組の一例

取組項目	取組の概要	背景
里山で活動できる場の確保とつながりの創出	プロジェクトで里山について学んだ人がその後も里山活動が続けられるよう、他のプロジェクトや「さとぶろ。機構」と連携を深め、活動機会・場所の展開を進めていく。	里山での活動は様々であり、さとぶろ。学校の限られたカリキュラムの中だけでは伝えきれない。次のステップへ進めるような仕組みが必要。
受講生、スタッフとともに学べるさとぶろ。学校の仕組みづくり	受講生のニーズを的確にとらえたカリキュラムを創出するとともに、スタッフも楽しめる運営のあり方を検討する。	受講生の年齢層が多様化し、興味・関心も幅広くなっている。魅力のあるカリキュラムを検討する一方、運営面での持続可能性についても求められる。

#### 4) 里山の魅力発見プロジェクト

##### ① プロジェクトが目指す成果

このプロジェクトは、里山がもつ様々な魅力に気づいた誰もが、その魅力を発信することを企画し、楽しむ仲間を増やすことができるプロジェクトです。こうした取組を通じて、より深く市民に向けて里山の魅力を伝えていきます。

また、鳥獣被害や放置竹林など、里山が抱える社会的課題の発生原因の一つは、私たちの里山への関わりが薄くなったことも発生原因の一つです。里山の魅力をより深く知ることで、こういった社会的課題の解決に向けた取組に結びつくと期待されます。

このプロジェクトでは、里山での活動を楽しむ仲間を増やすとともに、社会的課題に向き合い、その解決に向けてみんなで考える取組を進めていきます。

##### 【取組目標】

市内の里山の豊富な魅力を発信し、里山を楽しむ場、機会、そして市民の関わりを多様化させ、里山が抱える社会的課題にアプローチする。



## ② プロジェクトの内容

第1次計画から第2次計画を経て、里山を楽しむ団体や企画は確実に増え、活動内容も多様化し、さとぷろ。の活動は確実に広がりと深まりが増しています。第3次計画においては、プロジェクトの活動により多くの市民が参加できるよう、「さとぷろ。機構」との連携を深め、充実したイベントや活動となるような仕組みをつくります。

また、社会的課題に対する取組として、他のプロジェクトにおける取組やさとぷろ。との関係が薄かった分野とも繋がり、連携することで、課題解決の糸口を探っていきます。

表 3.4 取組の一例

取組項目	取組の概要	背景
里山の魅力を発信する活動	里山の魅力を発見し発信する企画を運営するとともに、より多くの市民が里山での活動に積極的に参加できるようになる仕組みづくりを行う。	「さとぷろ。」の認知度はまだ低い状況にあり、さとぷろ。の取組を知らない層に向けた里山の魅力発信と、そこに参加する動機付けが必要。
里山に関わる社会的課題の解決に向けた活動	これまでつながりがなかった分野にも目を向け、社会的課題の解決に向けた企画を提案し、展開していく。	第2次計画を経て、里山の抱える課題にフォーカスしたイベントなども実施してきたが、今後は解決に向けた具体的な取組を進めていく必要がある。

## 4 計画の推進体制と実行のあり方

本計画は、里山再生の未来像に共感した市民、事業者、そして行政が集う4つのプロジェクトが推進の主要な動力となります。さとぷろ。機構は、4つのプロジェクトを縦横断的につなぎ、活動の支援や情報の集約と蓄積といった役割を担います。また、プロジェクトに関わるさとぷろ。サポーターは、計画の推進において重要な役割を担っています。

さらに、プロジェクトに参加していない里山再生に関わる市民などもあります。こうした市民などもまた、本計画の推進の上でとても重要な存在です。そして、これらの里山再生に携わる多様な主体が連携しながら取り組むことで、相乗効果を発揮できる体制を支援するのが、安曇野市里山再生計画推進協議会（以下「協議会」といいます。）です。

### （1）さとぷろ。機構による中間支援

第2次計画までに増してきた活動の深まりや広がりを第3次計画でも持続的に推進していくことが重要です。さとぷろ。の持続的な活動のために設立されたさとぷろ。機構は、プロジェクトの連携やプラットフォームを整備するなどの中間支援の役割を担います。また、市内の社会的課題解決のため独自の事業を行います。

#### 1) プラットフォームの整備と運用

プロジェクト活動を推進するための活動支援として、資機材や会議スペースの貸し出しなどを行います。また、活動する団体の活動基盤を支援するため、活動保険の提供や活動資金の確保のための支援を行います。

表 4.1 プラットフォーム整備事業の内容

項目	事業内容
活動支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 資機材管理、貸出など</li> <li>・ ミーティング場所などの提供</li> </ul>
基盤支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 活動保険の提供</li> <li>・ スタートアップ支援</li> <li>・ 人員確保支援（有志募集、大学との連携など）</li> <li>・ 予算確保支援（活動費管理、民間助成金獲得支援など）</li> </ul>
運営支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ イベント実施計画作成の助言</li> <li>・ イベント広報などの助言</li> </ul>

## 2) 情報基盤の整備

さとぷろ。に関わる団体・個人が増えることにより、そのネットワーク化が必要となります。また、これまでの活動やそこから得られたノウハウなどの様々な情報を管理していく必要もあります。そういった情報を集約・蓄積し、必要に応じて発信していく役割を担います。

表 4.2 情報基盤整備事業の内容

項目	事業内容
情報集約	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市と共同で情報集約</li> </ul> ※各団体の活動実績、活動推進に係る関係者の意見など
情報蓄積	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ さとぷろ。ホームページ保守管理</li> <li>・ さとぷろ。SNS の更新</li> </ul> ※プロジェクトの活動実績
情報発信	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ さとぷろ。サポーターへの情報提供</li> <li>・ 市と協働で外部からの問合せ対応</li> <li>・ プロジェクト間、関係団体との交流支援</li> <li>・ さとぷろ。広報資料作成</li> </ul>

### 3) 社会的課題解決の協働

さとぶろ。を推進するためのさとぶろ。機構が持続的に運営していくために、独自の事業も展開していきます。その事業内容は、里山をとりまく社会課題の解決のために地域やプロジェクトなどと協働で事業を行います。

**表 4.3 社会的課題解決協働事業の内容**

項目	事業内容
薪生産	<ul style="list-style-type: none"><li>・市内の松枯れ材、支障木などを用いた薪の生産</li><li>・販売、納品（安曇野しゃくなげの湯など）</li></ul>
焚きつけ材生産	<ul style="list-style-type: none"><li>・製材時の端材を用いた焚きつけ材の生産</li><li>・販売、販路開拓</li></ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"><li>・柿、竹林、栗などの里山資源の活用</li></ul>

## (2) 計画の具体的な推進の体制

4つのプロジェクトは、それぞれの里山再生に向けた取組を進める市民、事業者、そして行政が一つのテーブルにつき、課題解決に向けた取組を協議する場であり、誰もが自由に参加できます。また、プロジェクトに直接参加していない市民などや課題を抱えた地域とのネットワークを構築しながら、里山再生の取組を推進します。

さとぷろ。機構は、4つのプロジェクト間の情報共有を行い、さとぷろ。活動を支援します。さらに、活動支援のルールや仕組みを整備することで、多くの市民がさとぷろ。活動に関わるメリットを享受できる環境を作り、里山再生について楽しく語り合う場を創出します。

協議会は、識見を有する者・森林林業に関する市民団体・林業関係者・山林所有者・公募委員などで構成され、それぞれが対等な立場で、さとぷろ。の活動が里山の未来像に向かっているかを協議します。そしてプロジェクトを俯瞰した上で、助言・提言し、時に各プロジェクトと連携して実行の一翼を担います。

市は、里山再生計画の策定及び実行に責任をもち、事務局として協議会並びにプロジェクト会議を運営します。また、さとぷろ。機構とも連携し、里山再生に関わる取組の全体を推進します。



合同会議で  
プロジェクト活動の情報共有



里山再生計画推進協議会での議論

表 4.4 プロジェクトおよびさとぷろ。機構、協議会、市の役割

主体	役割
プロジェクト	<ul style="list-style-type: none"> <li>任意で集まる主体が、会議で里山の未来像や地域が抱える課題を共有しながら、解決に向けた活動を企画運営し、里山の再生に向けた具体的な取組を行う。</li> </ul>
さとぷろ。機構	<ul style="list-style-type: none"> <li>プロジェクトの活動がより幅広く深みのあるものになるよう、プロジェクトや協議会のみならず、関連する取組、団体などをつなぐプラットフォームの役割を果たす。</li> </ul>
協議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>4つのプロジェクトの取組内容及び関連する取組などを俯瞰した上で、プロジェクトの取組が里山再生の未来像に向かっているかを確認し、解決方策を提案する。</li> <li>プロジェクト同士が連携して取り組むことにより、相乗効果を発揮するため、人や情報のネットワーク化を推進し、時に実行主体となる。</li> </ul>
安曇野市	<ul style="list-style-type: none"> <li>里山再生計画策定とその実行の責任を負い、協議会並びにプロジェクト会議を運営する。</li> <li>さとぷろ。機構に参画し、連携して里山再生の取組を推進する。</li> </ul>

### (3) さとぷろ。拠点施設の効果的運用

令和6年度の「自治体 SDGs モデル事業」を活用し、穂高牧地区にある「旧離山会館」をさとぷろ。の拠点施設として整備します。さとぷろ。機構の事務所機能を有し、ミーティングや小規模なイベントなどの実施、資器材の保管・貸出拠点とします。さとぷろ。に関わる多くの人々が集い、情報交換や里山の未来を語り合う場を創出します。



旧離山会館 外観



旧離山会館 玄関ホール

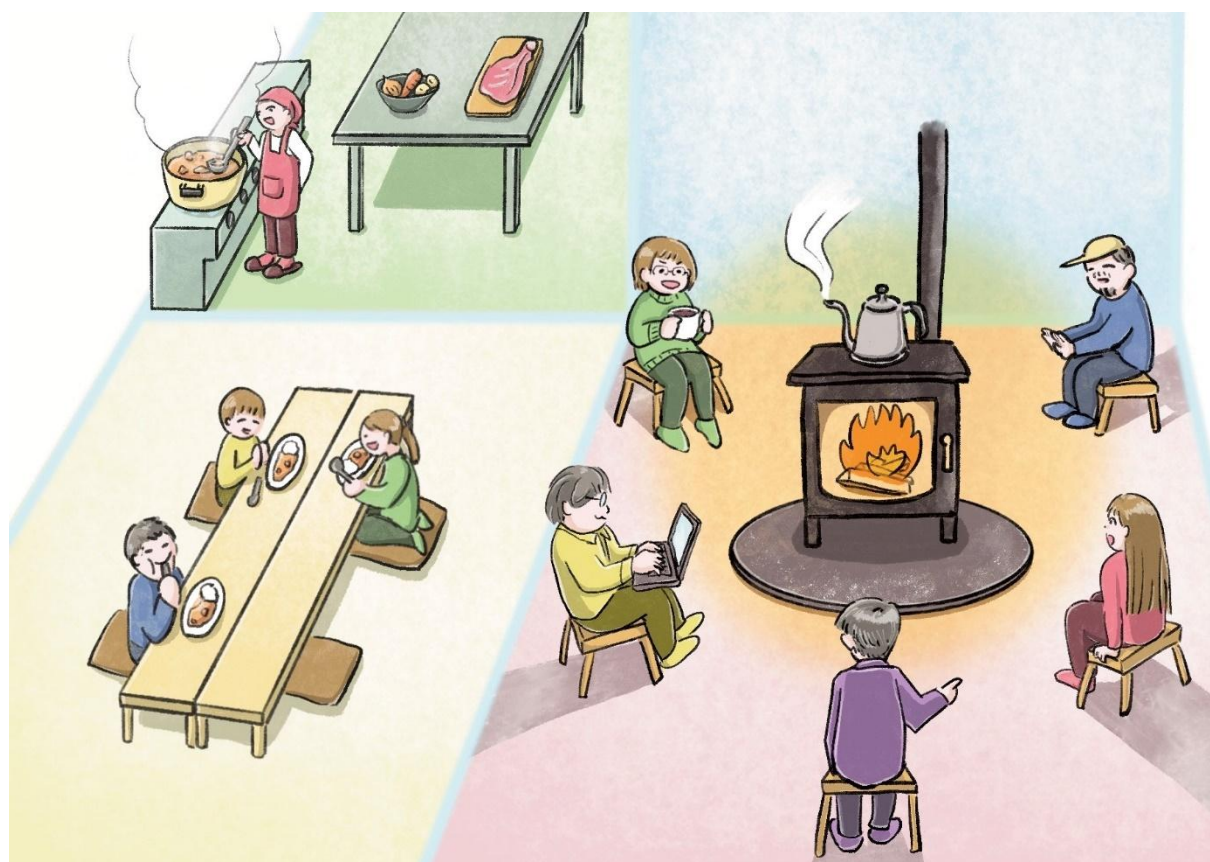


図 4.1 さとぷろ。拠点施設の活用イメージ

#### (4) 計画実行のあり方

プロジェクトでは、それぞれが目指す成果(56-62頁)を踏まえ、第2次計画にも実施した通り毎年度その時点での課題を整理して、取り組むべき内容を計画することが、歩みを進める上で重要です。活動が進めば状況が変わったり、新たな課題が見つかったりすることも多いでしょう。その都度プロジェクト会議では、取組内容が目指す成果に向かっているか確認します。そして、年度当初に立てた計画を進める中で生じた問題点に対して、必要に応じて修正しながら取り組みます。重要なことは、そうしたプロセスをプロジェクトメンバーが記録し、共有し、適宜評価・修正することです。状況の変化に応じて計画も見直し、取組を継続する「順応的管理」こそ重要です。

そのためには、さとぶろ。機構が中間支援機能を発揮することが必要となります。各プロジェクトが年度当初に立てる計画は各プロジェクトメンバーと市が主体となりますが、さとぶろ。機構はこれをサポートします。また、各プロジェクトにおける個別の活動の企画・調整は、さとぶろ。機構が主体となって支援をし、市もこれをサポートします。さらに市や協議会が活動評価をするためのデータ取りまとめについても市をサポートします。一方で、プロジェクトやさとぶろ。機構に参画していないものの、里山に関わる取組を展開する市民、企業、団体などの存在も欠かせません。こうした市民、企業などがさとぶろ。と連携する仕組みを生み出し、運用することもさとぶろ。機構の重要な役割です。

このように、4つのプロジェクトと協議会、市、そして市民、企業、団体などを縦横断的につなぐことで、情報共有や課題の受け渡しをよりスムーズに行う仕組みを整え、里山再生に向けた活動をより強力に推進していきます。

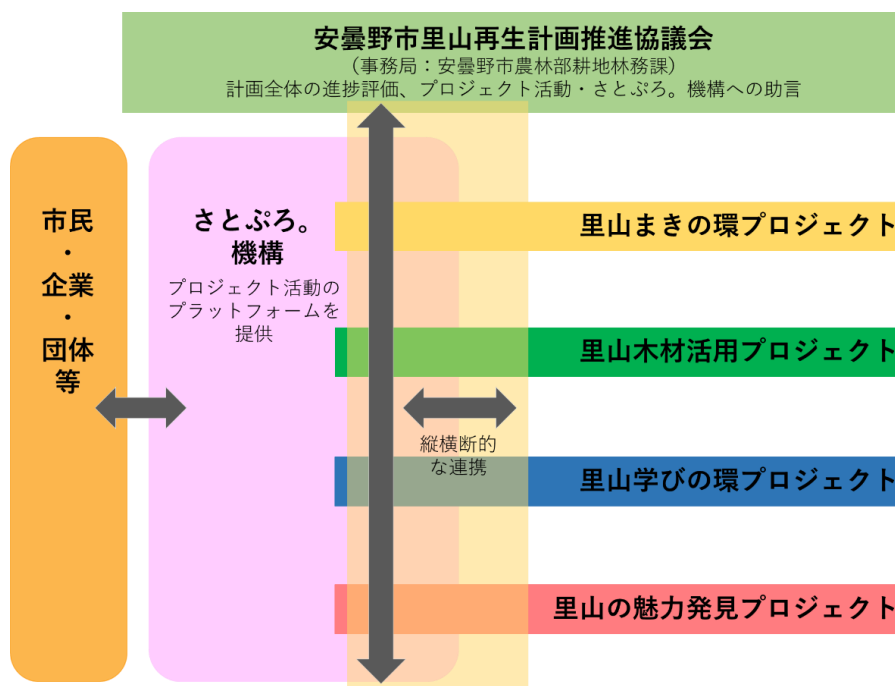


図 4.2 計画推進体制のあり方 (イメージ図)